
白黒

誘森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白黒

【Zコード】

Z3557D

【作者名】

誘森

【あらすじ】

人と妖が共存する世界。その世界のとある国、とある村に住む、とある少年達。数奇な星宿の元に生まれし一人の、ちょっととした冒険の書：第一弾。基本的に読みきりですが、個人的に気に入っていますのでシリーズ化したいと思っています。よろしければ是非是非読んでください！！

(前書き)

シリアルス×ギャグ×すつたもんだの大乱闘（（嘘））

黒い蝶が飛んでいくのを見かけた。

白い蝶の群れの中にただ一匹。

漆黒の蝶が、ひらり ひらり と。

「深、またなんか見えたのか？」

少し遠くから聞こえる幼馴染の声に、
ただ頷いた。

「おーい、深聞こえてんの？」

また、頷く。

「なー返事しちゃば」

生い茂る草を搔き分けて、
緑の木々の間を走り抜けて、じゅりりに向かってくる。
搔き分けられた草の間から、
またひらひらと白い蝶が飛び出していく。
そして、蝶でないものも。

「慶^{けい}、動いちやだめ」

「え」

今しがた慶が通り過ぎた場所から、
乳白色の大蜘蛛が飛び出してくる。
それはしゅるしゅると見えない糸を吐き出し、
慶の体をぐるぐる巻きにしていく。

深はゆづくりと慶に近づき、
絡みついた糸を慎重にはがしていく。
乳白色の大蜘蛛は、深が近づくと同時に逃げ出した。
何者にも邪魔されることなく、全ての糸をはがし終えると、
慶の背中に産み付けられた卵に息を吹きかけて、
次また生まれてくるであろう蜘蛛の子等を始末した。

「慶は妖を呼^{あやかし}ぶから、

僕から離れちゃダメだつて、言われたでしょ、里長に」

僕はちゃんと覚えてたよ。

そつ言いながらむくれる慶を鼻で笑つてやる。

慶の祖父にあたる里長は、
深ほどではないにせよ強い靈能力を持つた人物で、
妖に関する知識は里で最も豊富だ。
ゆえに、妖が増え行く昨今では、里長の「こと」が絶対なのだ。

見えない糸から開放されて、

体の自由を取り戻した慶は、不服気に頬を膨らませる。

「急がねえと日が暮れるのに、
深がぼけえっと突つ立つ立つてゐるからじゃねーかつ
さつむと帰らうぜ、つたく」

攻められて、

初めて自分が立ち止まっていたことを知つた。
攻められっぱなしといつのは悔しいものなので、
思わず申し開きする。

「だつて、黒いやつがいたんだ」

「黒いやつって、じこさまが危ないって言つてた?」

深は頷いた。

妖には位があつて、色が薄ければ薄いほど、
その力は弱く、また人にとって無害なものとなり、
色が濃ければ濃いほど強く、有害なものとなる。

だから、

透明で気配でしか感知できないものが最下位で、
黒くて確かに存在感をもつたものが最上位に立つ。

木々の間から、沈み行く太陽を眺め、
里長の言葉を思い返す。

『良いか、深。

色彩が鮮やか以上の妖に近づいてはならん。
近づくだけで命を吸われるからな』

それから、口癖のように言つてのこと。

『夜になると妖の力が増す。
完全に日が落ちる前に里の中にもどれ。
さもなくば酷い目にあうぞ』

ほんやりと眺めていた夕日は、
もう半分以上沈んでいた。

「慶、いいかげん里に帰ったほうがいいと思つよ？」

幼馴染は、眉尻を吊り上げて怒鳴り返してきた。

「おまえ人の話聞けよつ」

「それで慶にぶん殴られたのか」

手渡された手ぬぐいを頬に押し当てながら、
深く頷く。

冷水をたっぷりと吸つた手ぬぐいはひんやりとして、
赤くはれた頬にはとても心地よかつた。

「あれは昔からすゞに手が出るからな」

我が孫ながら情けないと溜息をついた里長は、皺がよつて細くなつた田打ちりと深の方を伺い見る。

「おまえさんも昔から間抜けすぎるのが

ぼーっとしずぎた深に腹を立てた慶は、深の左頬を沈み行く太陽と同じ色に染め、半ば深を呑むかのようにして里に帰ってきた。

家に飛び込んで山菜を詰め込んだ籠を下ろすと、そのまま奥の自室に駆け込み、そこにじっとしてしまつた。

独り里の入り口に放り出された深は、ただそこに座つていた。いつものようにぼーっとしているところを、里を見回っていた里長に発見され、今に至る。

「おまえには力がある。

自ら望んで手に入れた力でないにせよ、力を持つとそれに対する責任が生まれるものだ。だからしつかりするべきだと、儂は思うんだがな。」

聞き覚えのあることを言われて、なぜだかカチンときた。

「なにが理由でそんなにぼけーっとするもんかの……」

「だつて、黒いやつがいたんだ」

慶に言つたのと、同じ事を言つ。

だが、里長の反応は慶とは違つものだった。
彼は皺に埋もれかけた目を限界まで見開き、
深に掴みかからんばかりの勢いで問いただす。

「それはまことか？」

里の周辺に黒い妖がおったのか？

深、答える。それはまことに漆黒であったか？」

自分の着物の襟を握り締めて

冷や汗を浮かべながら迫つてくる里長に引きながらも、
深は素直にうなずいた。

「白い蝶の中に一匹だけ、黒い蝶がいた」

その情景は神祕的で、美しく、思わず見とれた。

春の息吹を受けて青々と茂る若草の中。

無数の光とともに自分を取り囲んだ白い蝶。

半透明なそれに力はなく、害もない。

ただ美しく、非現実的に、空中を舞うだけ。

その群れの中に黒一点。

蝶の形をした白い波の中を泳ぐよつゝ、
ひるがえり ひらめき ひらひらと舞つ。

優雅ともいえようその姿に、

危険を感じることはなかつた。

それを里長に話しても、

ただ「危機感が足りない」と言われるだけだろうから、言わずにいた。

黙つて、いい子に里長のお説教を聞いた。

「こりゃいかんな。
里の周辺はしつかりと清めておるから、
害をもたらすようなのは近づかないはずだが…
もしや慶に惹かれてきたのか…」

慶は、妖が近づきたくなる気の持ち主だという。
慶といふるとやたらと妖が寄つてくるから、
それは本当のことだと思つ。

だからこそ、妖が嫌いな氣を持つ深が慶のそばにいる。
そうすることでバランスが保てるから、
一人と、里のみんなにとってそれが最善なのだという。

けれど、独りでぼーっとしているのが好きな深と、
大勢の輪の中で戯れるのが好きな慶とでは、
人格的な波長というものがどうしても合わず、
たびたび今日のように喧嘩別れすることがある。

といつても、限りなく鈍感な深に腹を立てた慶が
深をぶつとばすか怒鳴るかして、

一人で去つていいくのが通例なので、

俗に言つ「喧嘩」とは少しづれてゐるのだが。

「里長、放してください」

いい加減不快感を感じ始めたので、

里長に着物の襟を放してくれるよつて頼んだ。

「いやもじ慶でないとすれば…」

だが、一人で考えに浸っている里長に、控えめな深の声は届かない。

なので、深は里長の考え方事が一段落するまで、待つことにした。

そうすれば、里長に自分に声は届くであろうから。

黒い蝶が飛んでいた。

白くて半透明の蝶の群れの中を、漆黒、優雅に、堂々と、我が物顔で。

右も、左も、上も、下も。

視界の全てが白い蝶で埋め尽くされた世界で、たつた一匹の黒い蝶は、

黒であるはずなのに、とても色鮮やかに見えた。

そのまましばらく見とれていると、

田の端で灰色のものが ひら ひら とひらめいた。

反射的にそちらの方に手をやると、
白かった蝶がものすごい勢いで灰色に、
そして次第に黒へと変化していくのが見えた。

視界が白から灰色に、そして灰色から黒に、
黒から光通さぬ漆黒へと染め替えられていく中、
深はその情景の中心で、ただ呆然とながめていた。

このような光景を見たら、里長は恐れおののくだらう。
慶は妖を惹きつけるくせに妖の姿は見えないから、
その情景に見とれてぼーっとする深に腹を立てるだらう。

そんなことを考へていて、

自分が今いる場所が非現実的な空間であることに気がつく。

(夢だ… いつ寝たんだっけ…)

ぼんやりとした記憶をたどつてみると、
背中に何かでぶたれたような痛みがはしる。

背中の鈍痛の理由に考えを巡らせてみると、
こんじは何かに押されて体が横に転がる。

頬をなにかにこすり付けて、しひれるような痛みを感じる。
どれも痛みとしてはたいしたことはないので、
特に気にすることでもないのだが、
なぜか急に寒くなってきた。

無意識の中に、手探りでぬくもりを探した。

そして、なにかやわらかいものを掴み、
それにつきり手を振り払われて、目が覚めた。

(慶…)

色のくすんだ敷布団の真ん中に大の字で寝ている慶は、
暖かそうな掛け布団を体中に巻きつけていた。
比べて、自分は冷たい畳の上に、布団もなく転がっている。

そこで、背中の鈍痛は慶の蹴り、

頬のしごれは目の粗い畠にこすり付けてしまったから、
そして肌寒さは慶に布団から追い出されたからだと、
今の自分の状況をしつかりと理解した。

おそれく、あの時自分が掴み、

そして振り払われたのは慶の腕だらう。

腹が立つたので、慶が寝ているにもかかわらず、

どんな脅し文句よりも彼に劇的な効果を發揮する、

『怒ったときのみ発生。深様の不適な笑み』を浮かべる。

けれど、につくき慶のおばかは、

相変わらず気持ちよそうに寝ているのでもう諦めた。

気迫で悪夢でも見てくれるかと思ったが、そつでもないらしい。

武器である笑顔を引っ込めると、畠の上で横になり、
特に何を考えるでもなくぼーっとしていたが、

やがて夜明けを告げる鳥のさえずりと、

障子にあいた無数の穴から差し込む弱々しい朝日と気づき、

ゆづくと状態を起じ、座つて、それを聞き、眺めた。

どれほど間をうしていったのか。

障子に、ひらひらと舞う何かの影が映つた。

右に、左に。

通り過ぎてはまたもびっくりするかの影をじぞうへ見つめてから、それが蝶の形をしてことにつとに気づく。

上ぐ、下ぐ、ゆらゆらと揺れるようなその動きに

呼ばれてこるような気分にせられ、深は立ち上がった。

慶を起じかなこよひに足音をしのばせ、

障子を開けるときも、

音を立てないよひ、細心の注意を払つた。

外に出ると、先ほじまで飛んでいた蝶の姿はなく、ただ弱々しい朝日が東の空からこぼれるばかり。

左を向いて、花壇の菜の花を見る。

右を向いて、立ち並ぶ木造の小さな家々を見る。
振り返り、相変わらず熟睡中の慶の姿を確認する。
そして前に向き直り…

鼻先を、黒いものが掠めた。

甘いよひな、苦いよひな。
かぐわしいとも、不快ともいえない、
けれどどこか心惹かれるものある匂いが、

鼻先を掠めた黒いものからだよい、
深の周りを漂い続ける。

一
う
・
・
・
」

は、として、振り返った。

同上

「ああああ！」めんなさしい一・二

慶が、自分で自分にまきつけた布団と格闘しながら、寝言を言っていた。

手足をとろりとした動作でばたつかせ、眉根を寄せで、何かから逃れようと、もがく。

なんだ。

氣迫で悪夢を見せれたではないか。

この僕の睡眠を妨害した罰だ。

「かつかあちゃん……、ちゃんと全部食つからああ……。」

夢の中の慶は、食事を残して母親に怒られているらしく、悲痛な声で叫んでいた。

慶曰く、『かあちゃんは妖が尻尾巻いて逃げるくらい怖ええつ
のだそうだ。』

けれど、深てみれば同じでもいる普通のお母さんで、怖いのが、むしろとても優しいと思つ。

現に、山にポイ捨てされた深を拾つてくれたのは、慶の母。

彼女は一年前のはやり病で命を落している。

その後、間抜けでぼーっとしていることが多い。深の生活の援助をしてくれているのは、慶の母だ。

「がああつつ」

慶が悲痛な叫びを上げたので、我に返る。

一瞬だけ目を閉じ、そして開いた瞬間。
黒くてひらひらとしたものが、再度鼻先を掠めた。
そして、またあの不思議な匂いが空中に広がる。

今度こそ見失うまといと、匂いをたどるよつて空を仰ぎ見る。
すると、空中に群れを成して飛ぶ、銀灰色の蝶を見つけた。
そしてそのなかにただ一匹、漆黒の蝶が混ざっている。

それらは深に見つけられるのを待つていたかのようじ、
深がそれらの姿をはつきりと認識すると同時に動き出した。

行ってしまう。

そう思つたから、裸足のまま縁側から飛び降り、
走つて蝶の群れを追う。

ちゅうぢら　と　ひらひら　と。

早いわけではないけれど、決して遅くはない速度で。

現のものでない蝶の群れは移動続ける。

里を出た。

人が作つた道から外れた。

獣道を走つた。

急になつていく山の斜面を駆け上がる。

木々の間をすりぬけ、太い尾根を飛び越え、
生い茂る草を搔き分け、ただ、ひたすら。
何かに取り付かれたように、夢中になつて、
ただただ、蝶の群れを追つた。

頭のひつぺんに落ちてきた鉄拳が、慶の言葉をうずついた。

しごれるような痛みに自然と涙田になつながら、『愛の鞭ー』をかました母を上田遣いに睨む。

「こつてえなあー。」

「当然だよつこのバカ息子ー。」

「ば…っ 僕が深にバカつて言つたら怒るくせーーー。」

「文句なら深ちゃんより賢くなつてから言いな

「これは酷い。

今のはあまりにも酷い。

慈愛に満ちた母が息子に対しても口にする言葉ではない。

「それが母親の言つ言葉かーーー。」

「あんた生みの親の顔も忘れたのかい」

「ぐ…」

やまつゆは強かつた。

口では勝てないと悟った慶は、最後の手段に出る。

「やつこー家出してやるーーー。」

叫ぶ途と同時に踵を返し、慶は外へと駆け出した。

そんなバカ息子を見送る母の田は、

呆れを隠せずにいるものの、どこか優しかった。

「夕飯までには帰つておいで」

「栗（くり）飯（いのし）じゃないと帰つてこない……。」

照れくさやうに叫び返した小さな背中は、やがて見えなくなつた。

開けた場所に出た。

突き抜けるような晴天の空に、蝶の漆黒は良く映えた。

それを囲む銀灰色の蝶達も、田の光を浴びて輝いていた。

しばらくその光景に見とれていると、

方々から色とりどりの蝶の群れが集まり、
ここまで深を導いてきた群れと合流し、
やがて大きな渦となる。

それはもう、近づくもの全てを飲み込まんとするほどに、
強力で魅力的な大渦に、そしてやがて竜巻に。

吸い込まれる

そつ思つたときこはむかつ、別の場所に飛ばされていた。

そこは、薄紫の霧に包まれた豪奢な部屋。
広いそこは数々の装飾品でじつたがえし、
足の踏み場がない。

ところどころに燈された蠟燭の灯りが、
薄紫の霧の向こうで怪しい青に揺れる。

状況の飲み込めない深は、
とりあえずぼーっとそれらを眺めることに決めた。

薄紫の霧は、あの不思議な匂いを放っていた。

霧の向こうに透ける華奢な鏡台。
足元に転がる高価な酒の数々。
無造作に放置された煌びやかな髪飾り。
部屋を囲むように立ち並ぶ大小さまざまの棚や箪笥。
それらがないところには、
座るのが躊躇われるほど豪華な椅子や、
その上に物を置くのは失礼かと思われるような高貴な机。
薄紫の霧に包まれたそれらはみな美しく、

異様で、妖艶に怪しかつた。

惚けたよつな顔をしている深を、何者かがクスリと笑つた。

少なからず驚いて声の主を探せば、
薄紫の霧が立ち込める部屋の最奥、
影でしか形を確認できないほど霧の奥に沈んだそれは、
優雅な曲線を描く、巨大な長椅子。

しかし、椅子が笑うなんて話は、聞いたことがない。

ぼんやりとした意識の中でおつとりと焦る深に、
長椅子はもう一度笑いかけた。

その笑い方から、長椅子の楽しそうな心情が伝わってくる。
笑う長椅子なんて奇怪な伝説を始めよつとこつのだから、
それは楽しいことこの上ないだろつ。

また、椅子が笑う。

ただ突つ立つて考えるだけでは
長椅子に笑われるだけだと判断し、

深は滑稽この上ないことを承知で長椅子に話しかけた。

「なにがそんなに楽しいの」

長椅子が、さらに楽しそうな笑いを零した。

なんだかもう、

いろんな意味でこの訳の分からなさに腹が立つてきた。

深の苛立ちを感じ取つたのか、
長椅子は焦つたように言葉を紡ぐ。

「『めんなさいね、笑つてしまつて。

ただあまりにもあなたが可愛らしかつたから』

その声は艶やかで、落ち着いた、

けれどどこか悪戯っぽさのある、知らない女の声だった。

そうか、この長椅子は雌なのか。

てつくり推すかと思つてしまつた深は、
自分の失礼さを恥じて頭を下げた。

「あら、どうして」

「僕はあなたを雄椅子だと思つていたから」

深はいたつて真面目に答えたつもりなのだが、
長椅子の笑いは楽しげにはじけた。

腹が立つほど楽しそうに笑う彼女に、深は少し困惑する。

「どうしてそんなに笑うの」

「だつて…つひ」

笑いをかみ殺しながら、長椅子は答える。

「わたくしは椅子ではありますませんもの」

真面目な顔で間違ったことをけろりと吐くあなたが、
どうしようもなく楽しかったのだと、彼女は言つ。

椅子でないなら、じゃあなんだ。

浮かんだ疑問をそのまま口にすれば、
椅子でないそれは少し寂しそうな口ぶりで答える。

「いやだわ。あなたをここまで連れてきたのは、わたくしなのに」

「だつて、長椅子の影しか見えないから」

非難されてむくれた深は、自分なりの真面目で言い返す。

霧の向こうから、まつと驚く氣配がした。

「あら、それはじめんなさい。

わたくしにはまつさりと見えるものだから……」

言しながら、影の形がゆらりと変わる。

長椅子から、そこに寝そべっていた何かが立ち上がったのだ。

ゆづくと、長椅子とは別の影がじかに近づいてくる。

「わたくし、

少し前にあなたの里の近くにある森に流れ着いたのだけど

その顔には、みつつのドレミが描かれていた。

「おこしそうな匂いのするお友達といふあなたを一目見て」

近づいてきた影には妙な威圧感があつたので、深は反射的に数歩後退つた。

足元にあつた酒瓶が、空っぽな音をたてて転がる。

「あなたの強い力を感じて、目の当たりにして」

霧にかすんで見えなかつた影の姿が、
深の目にはつきりと焼け付く。

「あなたのことが気に入つたのよ」

目の前に立っていたのは、
はね

漆黒の翅をもつ、優雅な黒髪の女性だった。

「いいい——ん！！」

里の中を一通り探しめた慶は、

もしや里の外にいるのではと、近くの森まで深を探しに来ていた。

「わつ口は高く上っているし、
ちょっと山菜を取りに行つたというのなら、
もう十分な量をとつて帰つてきてもいい」いろだ。

なのに、深はどこにもいない。

行き着けの池にも、
大量の山菜がとれる秘密の場所にも、
こつそりと作つた秘密基地にも、
深の姿はどこにもなかつた。

「どいつたんだ、あの万年脳内ぽっかぽっかの春野郎…」

親愛なる幼馴染に対して
限りなく失礼な真実をばやきながら、
それでも慶は深を探し続けた。

だつて深は、

昨日この森で『黒いやつを見た』と言つたのだから。
『力の強い妖は、人の心を惑わす』と、
じいさまが言つていたのだから。

昔から何かと流されやすい深だつたからこそ、
強い妖になんぞや吹き込まれて、
容易に連れて行かれたりしそうで心配なのだ。

「くつそー深！

ちょっと計算はやくて字の読み書きできるからって、
調子にのつて隠れてんじゃねえぞこのおーーー！」

独特な気合の入れ方をして、慶は深を探すため、力強く大地を蹴った。

「わたくしの元へいらっしゃい」

見ている者の頬を染める、妖艶な笑みを浮かべて彼女は言った。

「新しい名をあげる。

そして新しい居場所をあげる。

あなたをあなたのまま、新しい存在にしてあげる。わたくしには、それをやり遂げる力があるのだもの」

そこで言葉をきって、彼女はじっと深を見つめた。

「それに何より…」

切れ長で一重の瞳は、怪しく紫に輝いていた。

「それに何より、あなたは元来、”じちらがわ”の存在なのだから

言われた意味が、理解できなかつた。

彼女が漆黒の蝶であることは理解した。
気に入られたのも理解した。

今までの名前や住処、
その他諸々の全てを捨てて仲間になれ、
と言われたのだつて、理解できた。

けれど、今のは理解できなかつた。

どんなにがんばつても、

深い理解できる物事の領域から完全にはみ出していた。

「でも

沈黙。

「でも、だつて僕は」

白くなつたある頭で、必死に言葉を考える。

「僕は人間なのに」

そつ。

どうあがいたつて、深は生まれてこの方、
それこそ今までずっと人間だったのだから。

妖と人間とは、根本的なところが違つてゐると、
里長が言つていたのだから。

だから、深が彼女と同じ側の存在だなんてありえないのだ。

なのに

「違うわ」

漆黒の蝶は、あっさりとその真実を切り捨てた。
それが、彼女にとつての真実ではないから。

「あなたは長い間”人間”と過ごしたから、
”人間”に近くなつてしまつただけ。
”人間”に付けられた
”人間”でいるための”名前”を名乗つているから、
”人間”だと思い、思われているだけ。
だから…」

だから、

”人間”としての”名”を捨て、
”人間”から離れれば、
”彼女と同じ存在”に戻れるのだと、彼女は言つ。

深は、ただただ首を振る。

自分は慶をおいしそうだと思ったことはないし、
悪戯をして里の人たちに意地悪をする妖が好きではない。

いくら綺麗だと思うことがあつても、
それは異相のものに対する客観的な評価であり、
決して親近感などからくる

親しみをこめた優しい評価などではない。

違うのだ。

深は人間なのだから。

「僕は人間だから、できないよ」

だから、震える声で、そう告げる。

「できるわよ」

そして面白にほどこあつたと、否定される。

「だつてあなたの母親は、
あなたの命の半分が人間でないから、
あなたに恐れをなして山に捨てたのだから」

目の前から景色が消えた。

視界にあるのはただの白。

耳に届くものはことじ」とべ排除された。

もつ何も見えない、聞こえない。

だつて知らなかつた。

誰も教えてくれなかつた。

そんなこと夢にも思わなかつた。

そんなこと夢にも思わなかつた。

だから。

だから、

「ウ、
ソ、ダ」

潰れてへちゃげた声を、
感覚が麻痺した喉から搾り出す。

「嘘なんかじやないわ。

だつてわたくし人間なんて嫌いですもの。」

「ウソダ」

られつが上手く回らなくて、

それは日本語によくにた異国言葉のように発音される。

「あなたは”人間”に縛り付けているのは、
その”人間”と共に”人間”として生きるための”環境”と、
なによりも”人間”がつけた”人間”でいるための”名”」

紫の瞳が細められる。

「それら全てを捨ててしまいさえすれば…」

薄紫に彩られた、薄く形の良い唇が弧を描く。

「あなたは汚らしい”人間”の皮を脱ぎ捨てられる」

死人のごとく白い手が、深の頬に伸ばされる。
漆黒の爪先が、深の血色を失った頬を掠めた、瞬間。

バシツ

今まで、これほど強く、何かを拒絶したことはなかつた。

「嘘だ」

振り払われた白い手が、ほんのりと赤く染まる。

「僕の両親は”人間”だ」

自分が捨てられたのは、
そんな安くて愚かな過ちから目を背けるためではないと、
そう思いたかつた。

「僕は”妖”になんてなれない」

自分は完全に”人間”なのだと思いたかつた。

「だから今すぐ、里に返して」

もう、ここには居たくなかった。

じゃないと・・・

「ふざけないでちょうどいい

ピシャリと、深の言葉は切り捨てられる。

「現実逃避もいいかげんにしてください。わたくしはあなたがほしいの。

気に入ったのよ、このわたくしが。

だからわたくしの城へ招き入れたの。

わたくしだけの場所に、あなたを受け入れたの。

それほどあなたがほしかったのよ。

そのわたくしのありがたい申し出を、

そんな子供じみた愚かな現実逃避で振り払つつもりー?

それほどまでに不躾で失礼なことなどなくつてよー」

あまりの言い草に、さすがの深も腹が立つた。

それは困惑や戸惑いから来る苛立ちなどではなくて、
ただ深の意見を聞く耳持たない、

目の前の女の暴虐武人な態度が、物言いが。
彼女のもたらした混乱が、そして落胆の嵐が。

深から、優しくておつとりとした深らしさを奪い去る。

「里のみんなを苦しめる妖が、何様のつもりだ！」

漆黒の蝶は黒くて形の良い眉を吊り上げる。

「わけのわからないことをずっとしゃべつて。
勝手に僕のこと気に入つて。
何の遠慮もなく自分のわがまま僕に押し付けてきて。
いつたい何様にそんな態度が許されるんだっ！－！」

「長よ」

それは、じごく真面目な顔で紡がれた。

「似通つた属性の妖を束ねる、漆黒の長よ」

「それでも妖にかわりはないじゃないかつ
悪さしかしない傍迷惑な謎の生命体じやないか！－！」

「それは愚かな人間の無知がもたらした無礼な誤解だわ」

凜とした声が薄紫の空氣を切り裂く。

「妖は生物を超越した存在。

どこまでも自然と近しい場所にあり、

それとともににあることに誇りを抱くもの」

「里のみんなだつて……」

「一緒にしないでいただけるかしら?」

それは空気がしひれるほどの、憎悪に満ちた拒絕。

「人間は自己満足の元に正義を名乗り、
私欲の元に破壊をもたらす。

そして自我の元に不吉を呼び寄せ、

愚の元に絶望をかみしめる。

妖はそんな人間に對する憤りの結晶。

大地の怒り。

大海の悲しみ。

大氣の憎しみ。

そしてそれら全てを抱く星の想いの結晶なによ。

根本的なところが違う。

存在意義が違うのよ。

私達は想いの結晶体。

もたらすものは凶でもなく、吉でもない。

ただそこに、想いの結晶として存在するだけ。

人間は諸悪の権化。

もたらすものは滅びと破壊。

彼らは破壊者なのよ。

邪神によって作り出されたこの世の邪の結晶なによ

「じゃあ・・・」

漆黒の長は、首をかしげる。

「じゃあどうして、僕みたいのが生まれるんだよ」

「そうまでも妖が人間を嫌うなら、
どうして”愛の結晶”といわれる”子供”が生まれるのだろう。」

それはやはり、

妖が人間に良いところを見出したからではないのだろうか？

「よくある話よ。」

人間同士の間にできた、強い力を持つた子供。
それに引かれてやつてくる貧弱な妖。
存在が曖昧なほどに力の弱い妖は母親の腹を貫通して、
存在が曖昧なほど的新しいその命と融合する。

「あなたみたいな子供は、そうやって生まれるのよ。」

今度こそ、頭の奥が真っ白になつた。

身体が芯から冷え切つてゆくのを、遠くに感じる。

除々に手足の感覚がなくなり、視界がかすみ、
物音や温度が手の届かない場所まで離れていく。

気づいたら、白に染まっていた。

「おこひ、もう泣くな。
チンチクリンのクソガキでもお前は男だわ！」
「うう… ありがとわ'
慰めるフコして睨してくれやがつてよお、コソ畜生……」
「黙れ涙垂れ流しの鼻水小僧！
どいまでもみつともねえんだよ泥と垢の化身めが……」
「言こやがつたなつ
女一人まともに口説けないヘタレ野郎が……」
「ああかわいいなあ！
近頃のクツツソガキはどうでいんなす？」「言葉覚えるのかな！？
お兄さん知りたくてたまらないなー！
いやあ、子供つて成長が早くて見てて楽しいよー。
ああ、でも残念だな。
あんまり成長が早いと極楽への道のりが短くつて困つひやうよー。

うん、お兄さん寂しいけど、嬉しいから泣かなこよーーー！」

「嬉しいのかよつゝつていうかやめろクソ兄貴つゝー
ちょ、本氣で・・・つゝ首しめつゝ・・・・ぐはああつゝー
わつわと深ちゃん探せつてんだよ役立たずーーー！」
「！」

「なにしづわつてんだいバカ息子どもーーー！
わつわと深ちゃん探せつてんだよ役立たずーーー！」

兄と共に母ちやん必殺『愛の鞭ー』を頭に食らった兄弟は、
そろつて頭を抱え込みながらうつむく。

「もう日も沈みかけてる。
早く見つけないと、
深ちゃんは妖がそこかしこにいる里の外で、
一人で、一晩過ごすことになっちゃうんだ。」

五時間ほど深のことを探して野山を駆け回っていた慶が、
『深がなんかに持つていかれた！ー』
と、泥だらけの半べそで里に帰ってきたのは、
三時間ほど前のこと。

それから混乱状態の慶に、
頬をひっぱたくことで正氣を取り戻させた里長は
涙垂れ流しの慶から事情を聞きだし、
苦虫を噛み潰したような顔で里のものを集め、
”深搜索”にのりだしたのだ。

それでも、これだけの人数で探しているところ、
深の姿は一向に見つからない。

恐れていたことが起きたのではないかと、
里長は皺だらけの顔にさらに数本の皺を増やし、
皺で埋もれかけているその顔を苦渋の色に歪ませた。

夕暮れの森の中で見るその顔は、

なんだか妖よりも怖くて近寄りがたい気がしないでもない。

「やはり、深は妖に連れて行かれたのでは…」

たまたま傍にいた慶が、目を見張る。

それに気づいた里長はさりに顔中をしわくちゃにしたが、
それでも視線と気配で説明を求める慶に、
しかたなく自分の考えを話して聞かせた。
他のものには聞こえないよつて、じぶんへんな声で。

「いぐべ稀に、腹の中の子供に妖が取り付くことがある

慶の目は、やたらに見開かれる。

それこそ、

それ以上開いたら目玉が飛び出るのでは、と思ひへり。

「せうやつて生まれた子供は、たいてい人の姿をしていない。
だから氣味悪がられ、殺される。もしくは遠くへ捨てられる。」

「じ、じゅあ……？」

「これ以上無理なくらい顔を皺だらけにして、里長は厳肅な雰囲気をかもし出しながら頷いた。

「儂の娘…。お前の母は、都より帰郷する途中、深を見つけた。そのときの深には名前がなかつたから、それは人とも妖ともつかぬ異形な姿だった。けれどそれを恐れず、お前の母は深を里に連れ帰った。

この儂の娘だけあって、深になにかを感じたのだろう。「

夜中にこいつそりと里に戻ってきた慶の母は、里長を里の外で待つ深のところまで連れて行き、彼を驚かせたことだ。

「人型をした、けれど人でない、五歳ばかりの男の子だった。

頭髪は白く、その肌は闇夜に解ける黒。
うつろな瞳は深海のごとく厳かな藍。
纏うのはやはり異形のそれで、
その強い力はどこまでも儂をとまどわせた。」

それでも、彼はこいつの存在を、どうすればいいかを知っていた。

「儂はその男の子をこちらがわに繫ぎ止めるべく、人間の儂が、人間としてその子を生かすための人間に名をくれてやつた」

その名は、存在が中途半端な少年の中で、

もつとも際立つものにちなんで付けられた。

彼の持つ瞳は、深海のごとく、厳かな藍。

深。

「その名には、根元まで人であつてほしいとの願いも込めた」

だが、と。

里長はどこか諦めたように、小さく笑った。

「人の名を付けて、人の姿になつた深は、
それでも、相変わらず強い力をもつていた。
名に込められた願いにより、
妖を寄せ付けぬ気となつたそれだが、

これではいつか、強い妖が深の存在に気づいたとき、
気に入つて連れて行かれると思った。
もしくは、邪魔だと思って消されてしまうとな

そして今日。

彼の心配事は、現実となつた。

「まさかここまで早いとは……」

悲嘆のにじむ、その声。その言葉。その姿。

自らの祖父からあふれ出るその”諦め”的に、
慶の怒りは爆発した。

「ふつざけんなよ狸じじー！皺の化身ーー良い子の敵ーーーー」

急に意味不明なことを怒りを込めて怒鳴り始めた慶を、里の者達が驚きに振り返る。

「深のドアホが俺達をほつぽつて妖のどこに行つたつて！？
はああ？？

ふざけたこと抜かしてんじゃねえよ！
歳かよ！ 老化現象かよ！ 寝言は寝て言えってんだよーー！」

慶がかなり立てる内容に、里の者達は眉を潜める。

「あの間抜けは間抜けすぎで、じいじやなきややつでけねえんだよ。ボケつとして何も考えてない割にはけりやんとわかつてんだよ。

自分の居場所がどこかぐらいちゃんとわかつてんだよ。

だからあいつは山の中で迷子にならない。

いい加減な時間になると

俺が散々悲嘆にくれる姿をとくと見物してからだけどなーー!」

それは、深が通つた道には深の力の残り香が漂い、
彼がそれをたどることに長けているからだ、と。
知つてゐる内容なのに、その言葉は喉の奥にひつかつて、
上手く出でこない。

歳かな、と、血の孫に怒鳴られながら思つ。

「他のところに行きたくないから帰つてくるんだ。」

なんだかんだ言つて深はしつかりしてゐるんだよ。
一人で飯作れるし、裁縫もできるし、字の読み書きも計算もできる。
全部俺よりもずっとうまくできる。
深のやつすじく頭がいいんだよ。

それだから変なところで腹黒いけど……

あいつ貧弱だから畠仕事苦手だけど、
土の具合とか、雲行きとか、

食いモン作るのに大事なこと、すうよく分かつてんだよ。」

なんだかもう、めちゃくちゃだつた。
話があつちやこつちやで飛んでいく。
たとえそこを気にしないにしても、
それは全部、深が嫌いな畠仕事から逃れるために、
里長とかわした交換条件。
実地で働かないなら、働くものを支える知識をつけること。
それを深は、あのなんともいえない虚ろな顔で素直に受け入れ、
当然のように日々それをこなしていた。

その事実も、里長の喉の奥にひつこんだつきり出てこない。

「何も考えてないようで、他人のことちやんと考えてるんだよ。
だから深みたいな意味不明で宇宙人な
万年脳内ぽつかぽつかの春野郎でも、

みんなそれなりに受け入れてるんじゃないかなって」

最後のは、なんだか少し悲鳴に近かつた。

喉がかすれて、ひりひりする。

けど、そんなことはどうでもよかつた。

”深”のありかたを否定して、”深”を諦めるようなくそじじいに、心底腹が立つていたから、これでいい。

「深は、いつだって、里の一部だつたんだ」

真つ直ぐに、皺で埋もれた目を射抜く。

気持ちで。

視線で。

気迫で。

いま感じている感情の全てで。

「こまだって、これからだって、それは変わらない」

数歩下がって、不適な笑みを浮かべてやる。

怒ったときの深が見せる、稀なそれのまねをして。

「あいづはすつと、俺の親友なんだよ」

何があつても、そつだから。

だって結局、深はいいやつなのだから。

慶が大切に思う、里のいいやつらの一人なのだから。

「じゃ、友情に厚うーい慶様は、
迷子になりやがって心細い思いをしてる
さまあみろこんちくしょう！な深を探してくるから。

んで、一緒に里に帰つてくるから。

首長くして黙つて待つてろよ

この死に損ないのくそじじいが！……！」

そういうて、いく当てもなく駆け出した。

ただ、深とこいつのあんちくじゅう連れ戻すことだけ考えて。

そんな慶が迷子になるのは、もつ少しあとの話。

「新しい名前は何がいいかしら？」

あなた綺麗だから、名前も綺麗なほうがいいわよね？」

他の漆黒の長達にかわいい手下を見せびらかすのだと、妙にうきつきと楽しそうな漆黒の蝶は、名を黎れいと言つた。

なんでも、ある程度の力をつけた妖は、本能以外の自我を持つのだそうだ。

そして自分が名前をつけてほしい妖の下に付き、自立してある程度の妖と土地を収める力をつけたら、自立。それを”黒の巣立ち”と呼ぶのだと、先ほどそう聞かされた。

「違う名前ついわれても、なんだかしつくりこないな」

黒い肌をもつ少年は、白い爪の生えた手で頭をかいた。

”人間”としての名前をつけられてから、”人間でも妖でもない存在”であつたときの記憶はかなりぼやけていたのだが、それがいま”人間”の名前を放棄し、”人間でも妖でもない存在”に戻ることで、その記憶は随分と鮮明になつた。

村人達にやつかまれながら、自分を捨てるべく遠い山まで出向いた母。山奥深くに放り投げられた自分。母だった人は、

自分を憎悪と恐怖がみなぎる瞳でねめつけ、そして去つてこつた。

その帰り道で、夫とともに待ち構えていた村人達が、
その身をハツ裂きにすべく待ち構えていることも知らずに。

後々その切り刻まれた醜い姿を発見した自分が、
どうしようもない不快感と吐き気を感じることも知らずに、
彼女は無様にずたずたにされたのだ。

本当に、どうまでも浅はかで傍迷惑な女だと思つ。

「ねえ、あなた。
いまは中途半端な存在だからその容姿だけれど、
完全にこひら側にきたらどうなるのかしらっ。」

そんなこと聞かれても困るのだが、
これから世話になるであろう相手なのだし、
たとえ曖昧でもじつかりと答えるのが礼儀といつものだらう。
いつになくすつきつとした意識のなかで、
少年は黎に返すべき言葉を搜した。

「どうかな。

名前をつけるのは黎だから、あなたの影響を受けるのかな

「あら、やうかしら?
わたくしは最初から蝶だつたから、良くわからないけれど。
もしそつな、綺麗なだけでなく、優雅な名前がいいわねー。」

明るく、朗らかに。嬉しそうに黎は笑う。

そんな彼女に釣られるように、少年もわずかに頬を緩める。

切れ長で細い、一重の目は形が良いし、紫の瞳も綺麗だ。長い漆黒の髪はどこまでも真っ直ぐで艶やかで美しい。体つきはしなやかだし、顔の造作も整っている。

なにより、

彼女が背負う漆黒の翅が謎めいた魅力の中心となっている。それとなく鋭利な印象こそあるものの、彼女が魅力的な容姿をしていることに変わりはない。たとえそれが人のそれとはかけ離れていたとしても、変わりはない。

くわくわと踊るように部屋の中を放浪しながら、黎はうきつきと少年の名前を考える。

少年の未来を、期待を込めた明るい声で予想する。

「ねえ、どうしましょう。

わたくしたちの名前は基本的に一文字なのだけど、なんだか沢山付けたい名前がありすぎて困るわ」

落ち着いた藤色の打掛の袖が、

彼女が動くのとあわせて優雅に揺れる。

そこでふと、少年には疑問が浮かんだ。

「あなた達も人間と同じ字を使うの？」

すると、黎はきりりとした眉を吊り上げ、

薄紫の唇を尖らせてふてくされた顔を作る。

「しょうがないわ。

人間達がいろいろなものを作り始めるまで、
わたくしたちは無欲この上ない質素な生活をしていたのだもの」

ようするに、人間が頭を使った行動をするので、
それに張り合つて自分達も似たような文化を発達させてきたわけか。

「でも、やはりまったく同じなのは悔しいから、
わたくしたちはもつと沢山の象形文字を作つたわ。
あなた、これから覚えるのが大変ね」

そこまで朗らかに言われるとあまり大変そうに聞こえないのだが、
そこはあえてつっこまず、
良い子な少年は人好きのする笑みを浮かべた。

その後も、黎があまりにも長い間心の葛藤を
独り言で生中継しながら部屋中を放浪するものだから、
しびれをきらした少年が自分なりの提案をする。

「あなたが考え付いた名前を、いくつかあげてほしいな。
そしたら、その中から僕が選ぶから」

「あらだめよ！

それではわたくしが付けたことにならないでしょう？
どうしてもわたくしが決めないと！」

「それじゃ、早く決めて」

そろそろ待ちくたびれてきた少年は、
思わず言葉がそつけなくなってしまった。

が、再び血の思考のなかに沈み込んでしまった黎は、特に気にするそぶりは見せなかった。

その後さらに長い間、辛抱強く静かに待っていた少年は、ついにしびれを切らした。
しびれが切れたついでに意識も切れてしまつた。睡魔の手中に落ちてしまった。

誰かに名前を呼ばれた。

つい先ほど、捨てたばかりの人の名を。

なんだか、それは無礼な叫び声のよつて聞こえた。

びつじてそんなに自分を不快にさせるものに満ちているのか、少年には良くわからなかつた。

理解しかねるからこそ、理解しようと近づいた。

世界は真つ白で、かと思えば真つ黒。

それでもないかと思えばそこは虹色に輝いていた。

白と黒の間を永遠と迷つよつ、そんな感覚。

けれど、次第に近くになつてゆくその腹立たしいな声は、自分が確かに目的の場所へ進んでいるのだと教えてくれた。

あと、少し：

「くわおおおおおおおおおおおお

深のばかああ―――つ――

裏切り者！薄情者！考えなし！恩知らず！

腹黒！大間抜けええええええええええ――

見たこともない場所を彷徨いながら、

慶は叫び続けていた。

これだけ正直に心の叫びを口から流していれば、

相当の距離を隔てていても自分の居場所が分かるだろつ。

そしてわかつたら、あの腹黒は自分の言葉に報復しにくる。ほんやりとしたお人良しのようで、実は腹黒い狡猾狐野郎なのだ。幼馴染で親友の慶は、深のそんなどりを身をもつて知つている。

「いかれ！すかたん！へつぽこ――

お前実は迷子になつてるんだろつ！？

俺が迷子になつたら散々じいさまにチクる癖に、いい度胸だな！

向かうとこ敵なしだな！…おめでとう…！」

なんだか自分でも言つてゐる意味が掴めないが、それが今の自分の心情なのだから、良しとする。

「うわあ俺やだなあ！深がついに最強になつちまつたよー¹
その勢いで狸じじいのところに押しかけたら、
あの死に損ないぼつくり行つちゃうかもな！
いやー人生の別れつて悲しいね！」

がむしゃらに叫んでいたら、木の根に躊躇ってこけた。

顔をあげて、身体を起こしながら叫び続ける。

「くそお！！そろそろこの偉大なる慶様の毒舌も尽きてきたぜ！？
なのになんだこのあらん限りの罵声でも足りない憤りは！？」

ん？なんだつて？ああ！その声は森の妖精さんだね！！
俺君にあえて嬉しいよ！－え？良いこと教えてくれるつて？
それは俺さら嬉しくないな！－なになに－？

あのいかれで腹黒で性格と根性がぐにゃぐにゃ歪んだ、
方向音痴で迷子になつてゐる可愛そつだけビザまあ見ろ！－！な、
ド畜生で見事に期待を裏切る万年脳内ぽつかぽつかの春野郎」と
深の大バカっちゃんのことなんだね！－！－！

俺わかつたよ、うん！すつゝ理解した……。

もともとわかつてたけど

すこく哀しい一人芝居に付き合ってくれてありがとう……！
愛してるよ森の妖精さん……！

所詮俺が作り上げた嫌味の産物だけど、
君の心温かい友情出演には大感激さ……！

俺嬉しさのあまり泣いちゃう……！　えーん、えーん、えーん

ひとまず、次の罵声を考え付くまでも時間稼ぎとして、
わざとじりじする嘘泣きを繰り返すことにした。

さて、これかうどうしてくれたものか。

空にまわつ虹が出ているし、星も輝いている。

妖を引き寄せてしまつ慶としては、

もつとも外出を遠慮をせたいみたい時間帯。つまり夜。

このまま深が見つかならなかつたら、
きっと自分は妖に悪さをされてしまふ。
連れて行かれるかもしない。
食われてしまうかもしない。
どうしよう。困つたものだ。

でも、もし、どうせ妖に遭遇する体质なら……

「畜生ー、どーせならさつと深いところまで誘拐しやがれ……。」

そうしてくれたほうが、きっと話が早いから。

不愉快だ。邪魔するな。

けれど、そういう問題とはなにか違うものが、少年の足を止めようとする。

それは、行こうと思えば進める。
距離なのだから、歩けば縮む。

記憶の中に穴が開いたような、心地の悪い部分的な虚無感。

妙な焦燥感。

否、何かが足りないから、先に進めない。そんな感覚。

なんだが、不愉快な声は、
急に悲痛さに満ちた叫びをあげたようだった。
もう少しで、
発している言葉の内容が正確につかめる距離まで近づける。
けれど、何かがそれを阻もうとする。

自分はこの不愉快な声に、
がつんと一発言つてやらないくてはいけないのだから。

この、懐かしい、よく知っている、その不愉快な声に…

誰の声？

気配を感じたような気がする。

怒った深が無理やり笑つたときに出す、

あの不吉な全開の雰囲気のような、そんな気配が。

それは、慶の周りをふわふわと漂い続いているのだが、どれだけ見渡してもその気配の正体を掴めない。

けれど、その気配が、自分の行動の成果のよつたな気がして、疲れと呪きかけた罵声に対する焦りで、働くかなくなつていた頭を叱咤して、叫ぶ。

ばーかーしーん！

深はばあかだあ！

すりじいおーおーばーかーやーうーうーだー!..!..!..!..!..!..!..!..!..!

声の限りに

「俺がこんだけ探しても出てこないとはいい度胸だ！」

思いつく限りの

「いい加減にしろつての！」

なに？その諦めの悪さという気長な嫌がらせ根性！？すつごくネチネチしてて俺本当に怖いな！！

ついに「深が”溺愛する息子の嫁に対する姑のそれ”みたいなひつとい仕打ちを俺にするようになつたとはなーーー。」

深の氣を引く」とのできる

「あーあー！ひどいなーーー！」

今日は深の嫌味な姑進出の記念すべきひだから、みんなで良い子の看板に菊の花を捧げなきゃなあーーー。」「

言葉を

「それにしても宴会の主役はどうに行つたんだりうね！？まさかこんな夜中で迷子かな！？

叫び続ける。

「うわーだつせー！ ほんっとかっこ悪いなーーー。どうかしてゆよ深の頭は！ うん！ おかしい！ おかしかれ満点！－－ 脳みそには栄養れー点！－－

まあつたぐどうなんだらうねえ、それええ・・・・・ つづーーー。」

突然、なにかにぶん殴られた。

「なんか今すっごく爽やかな気分だな。

腹が立つ。腹が立つ腹が立つ腹が立つ腹が立つ。

不愉快だ。

自分の不愉快指数はもう限界を超えているのではないだろうか。

この温厚で優しい良い子で通っている自分を、

ここまで腹黒く狡猾な報復に燃える

悪の大魔王な気分にさせてくれる傍迷惑な愚か者は、ただ一人。

怒りこめた笑みを浮かべて、

目的の人物に狙いを定めながら腕を振り上げる。

そして…

それはもう慶の頭を思いつきりぶんなんぐつても足りないくらい、
それはそれは爽快で満ち足りた、

とんでもなく何かをもぎとりたい気分だよ。

例えば慶の嘘ペラペラ流す口とか口とか口とか…ね?

背後から聞いた朗らかな声は、
殺氣にもにた壯絶な空氣とともに、慶の耳に突き刺さった。

言い知れぬ恐怖のなか、慶はゆっくりと振り返る。

「・・・・・」

そして、また前方に顔を戻す。

あらゆる理由で全身に鳥肌が立つのを感じる。
なんだか、膝が笑っているような気がする。

「ねえ、君は何か僕に言わなくちゃいけないことがあると想つんだ

相変わらず明るく朗らかな声は、
容赦なく慶を追い詰める。

困ったな。

こんな底知れぬ恐怖と遭遇したいんじゃないかったのに。

とりあえず、その声の朗らかさに答えるべく、
精一杯の強がりと引きつりまくつた笑顔で振り帰った慶は、
恐怖に掠れて裏返った声で言った。

「「ん、ばん、わあ……だよね？」

腹部に拳がめり込むのを、遠のく意識のなかで感じた。

目が覚めたときには、月明かりに透ける見知った横顔があった。
それはいつもと同じぼーっとしたものだつたけれど、
その目には
いつになくはつきつとした意思が宿つてゐるよつて見えた。

「・・・深」

うすく腹部をかばいながら、なんとか上体を起しす。

空を見上げて突つ立つていた深は、慶を見下ろす形で振り向く。

見慣れた顔の向こうに、森の木々が透けていた。

慶は、絶句する。

混乱する頭で考えに考えた結果、とある結論にたどり着いた。

「おまえ実は透明人間だつたんだろー？」

ビシッ

間髪いれずに慶の頭は平手で殴打される。

けれど、それは気絶する前の一撃に比べればなんでもない。まったくあの生つ白くて細っこい腕のどこにこんな力があるのか。人体の謎であると慶は思った。

「透明なのはね、僕が今半分しかこにいないからだよ

言われてる意味が、良くわからない。

なので首をかしげて視線で先を促すと、
深は軽く頷いて説明を始める。

「僕は『元々”人間”でも”妖”でもない中途半端な存在なんだけど、
今日は…」

「あ、それ狸じじいに聞いた。俺その辺の事情知ってる

深は一瞬押し黙つてから、
やがて慶の発言の意味が脳に浸透したのか、驚きに目を見開く。
やつは狡猾なのが、やはり所詮は深。どこかどろい。

「深が里に来たあらましどか、名前がどうとか、その辺は聞いた

だから、その辺の説明は端折つてもかまわないと、慶は言つ。
深は一泊おいてから自嘲氣味に笑い、頷いて先を続けた。

慶は分かつていなかつたが、

深は正直に驚き、そして安堵していた。

一重に人間とは呼べない自分を、そのまま受け入れてくれる者が、

今、半透明状態である自分の田の前で、平然と座っている。

そしてその頼りない四肢には、山の中を散々彷徨つたのだろう、

切り傷や擦り傷、痣や泥に塗れていた。

自分にとつては鬼門である、”夜”という時間も無視して。

彼は深を探してくれていたのだ。

ぞろぞろと妖の群れを従えて。

「慶」

慶が連れてきてしまった妖の群れを払うのに苦労した深は、少しだけ声を低くして、不本意そうに傷だらけの少年の名を呼ぶ。

「ん？」

「君つてすゞしく面倒なやつだと思つよ」

「なつ……」

「けど、だから僕が傍にいないとね」

深の失礼な発言に対して怒るとしていた慶は、勢いをそがれてそのまま黙り込んだ。

深は、偽りでない、だがかすかな笑みを浮かべて、

慶と視線を合わせるよつこじゅがみこむ。

「あつがとつ

驚きによる、沈黙が落ちる。

やがて状況が飲み込めたのか、

照れくさそうな、不服気な、微妙な表情で慶は頭を搔いた。

「なんかその言い方だとさあ、面白っぽくて微妙…」

「僕も今そう思つた」

「ちょっとアレだよな、アレ」

「言つとくけど僕にそういう趣味はないからね」

いつになく強く断言されて、慶は固まる。

なんだかこう… 色んな意味で鬼気迫る表情の深に驚く。
かわいらしい友人間の「冗談を、そこまで真面目にバッサリ切るか?

「まあ深、冗談だつてば…」

「慶はね。けど僕は真面目に言つたから吐き気がする」

そういうて、深は本当に心底気持ち悪さついで顔をしかめた。

「ああ、そう。そつちなの…そつこつことなの…」

なんだか深の過去に触れる内容だつたりしたのか!…と、
焦つて後悔した慶なのだから、
反応が生ぬるくなつてもしようがない。

「感謝の意をこめて、これからも慶の尻拭いはしてあげるよ

なんだかむかつく言い方だったのだが、

どこかでなにかが失せてしまった慶はおとなしく聞いた。

「けど慶もそれなりに勉強して一人でその

半端なく面倒な体质で生きていく術を身に着けるべきだと思つ。大変なことを断言してしまつた優しい僕の負担を減らすために」

突っ込みたいところはあつた。

言つてやりたい言葉は頭の中を駆け巡つている。

けれど、もういい。先ほど慶の中で失せたのは、氣力なのだから。

相変わらず真面目な顔のまま、深は立ち上がり、空を見上げた。つられて、慶も空を見上げる。

月は上弦。

瞬く無数の星々は、普段と少しも変わらない姿でそこにある。今日はこんなにも、色んなことがあつたといつのに。

「黒い妖は、それぞの妖の群れを束ねる長なんだ」

慶が深の半透明の顔に視線をずらし、また空に戻した。深はかまわずに続ける。

「僕は”黎”って名前の人連れていかれた。

そこで自分の生き立ちとか、存在の形みたいなのを聞かされた。

それから、名前を付けてあげるから妖になれって言われた」

二人とも、眉一つ動かさず、ただ空を見上げる。

「他にも色々　　”人間”と”妖”的な、聞かされた。

それで、僕はいつたん”深”になる前の僕に戻つたんだ。

けど、黎があんまり長こいと名前を考えているから、
僕寝ちゃつて……」

深らしいなー……と、慶は思ひ。

「そしたら慶の声が聞こえたから、
幽体離脱みたいな感じでここに来た。
けど、抜け出せたのは”深”だけだから、僕は今半分。
だからほり、こんなに透け透け」

ふらふらと、深は自分の腕を慶の前で振つて見せた。
慶はそれを横目に見ながら、
深が言ったことを飲み下そうとしていた。

「”名前”っていうのはとても強力な”呪”なんだ。
だから僕は”深”になってから、
名前がなかつたときの記憶が朧おほほだつた。
それで、”深”的の前の僕になつたときは、”深”的の記憶が朧だつた。
だから、慶の声に反応して出てこれたのは、”深”だけなんだ。
けど、魂のかな?やつぱり向こう半分と繋がつてるから、
”深”じゃないときの記憶も今ははつきりしてゐる」

慶は少しの間考え込む。

「それだと、もう半分はまだその…黎つてやつとのどに面るわけ?..」

「うん。たぶんやつこうになると面へるわけ?..」

「じゃあ、”深”が人間の部分だから、
黎のところに残つたもう半分は妖の部分つてこと?..」

「きつとやうなるだらうなー…困るね」

そりやあ、もう…

身体が半分といつ時点で困つて当然なのだが…

「どんなふうに?」

具体的に、それがどう結果に繋がるのか、
勉強嫌いで単細胞な慶では今一理解に及べない。

深は心底嫌そうな顔をしてから、口を開く。

「たぶんね、黎はそろそろ名前をつけてると思つんだ。
それで、黎は力があるから、
”名前”をつけるとある程度相手を支配できる。
だから向こうに居るのが半分だけなのに気づいたら…」

一瞬、世界が真っ黒になつた気がした。

唐突な現象に二人が困惑の色を表していくと、
艶やか声がその空間に響いた。

「連れ戻しに着たわよ、宰^{さい}」

はつとして、二人が急いで振り返る。
純粹な驚きの色を示す慶の隣で、
深の顔は半透明ながら真っ青だった。

無数の黒灰色の蝶の群れを従えて立っているのは、

落ち着いた藤色の打ち掛けを纏い、
漆黒の翅を背負つた、紫の瞳と唇をもつ、長い黒髪の女。

「ひやー美人！」

こんなときには何を言うか。と、思ったのもつかの間。

黎の容姿に対する感想をのべる慶に驚きで目を見開く。

「慶、黎のことが見えるの？」

「え、あれが黎？じゃあなんで俺見えてんのー？」

「それはわたくしの存在が確かなものだからよ」

凛とした、けれどやはり艶やかな声が、答えを提供する。

「そこの”人間”でも見えるほど、わたくしの力が強いからよ」

唖然とした後、慶の顔が嫌そうに歪む。

力の強い妖なんて、あまり愉快な存在ではない。

その横で、相変わらず顔色の悪い深はあるものを見つけて、
青いじろりか、顔色をなくした。

半透明な深の視線の先には、半透明の生物が居た。

その肌は薄青く、ところどころ鱗に覆われていた。

手足の指の間には水かきのような膜が存在し、
指は比較的細長いのに対して指先は多きめで、尖っている。

頭髪と思われるそれは風もないのにゆらゆらと揺れ、
月明かりの下で白銀に輝く。

耳と思しきものは尖つていて、そして小さめ。
そしてその耳の後ろからは、
鱗じみたものがによつきつと生えている。

一目で分かる。人間でないと。

深い藍色の瞳と、灰色がかつた茶色の瞳が交差する。

「かわいらしいでしょう？」

この子、きっともう少し大きくなればとっても綺麗になるわ。
黒でない今でもこれだけの力があるのだもの。

あとほんの少し力をつければ、それこそビックリでも血潮でもあるわ

それはもう恍惚とした表情で、黎は楽しげに語る。
異形の肩に腕を絡ませて、唇を寄せて、
口付けるようなしぐさを繰り返す。

深は、震えていた。

こんな異形なものが自分の片割れだと思つと、寒気がした。
けれどその一方で、その異形が醜いとは、決して感じない。

人間とは自分と違つものを恐れる生き物。
恐れ、嫌悪し、その存在を否定することで、
やがてそれを追い詰めて滅ぼすのが本能。
けれど深には、目の前のそれを完全には否定することができない。
人間の部分だけが抜け出しているはずなのに、
今の自分は確かに”深”であるはずなのに、
異形のそれを、その姿を、当然にして自然なことのように感じじる。

ただ、本当に自分が人間ではない、

別の存在であったかと思うと、そのことが妙に恐ろしかった。
そして自分が人間になりきれていない気がして、怖かった。

そんな深の姿を舐めまわすような目で観察しながら、
黎は薄紫の唇から言葉を紡ぐ。

「わたくし、あなたに宰つて名前をつけたの。

”司る者”と書いて、”宰”。良い名前でしょう?
あなたがそのうち、とっても立派になるのが見えるかい。
わたくしそのときのあなたに相応しいように、と思つて付けたの。
どう? 気に入つてもらえたかしら?」

表情の読み取れないその存在 宰は、

先ほどから微動だにしていない。

不安定な上に、今まで表に出たことのない存在なのだから、
それは自然なことなのかもしれない。

けれど、その姿は表情豊かな黎の隣で、とても浮いていた。

深が、無意識のうちに一歩後退する。

「なんか俺さー拍子抜けしちゃった

唐突。

そしてその場の緊張感にそぐわない。

なんだか反応を返す気になれば、とりあえず深は無視をする。

だが、特に突っ込んでほしいわけではないのか、慶はそのまま、のんきな調子で続ける。

「強い力をもつた妖とかいうからやー
どんな怖いやつかとおもつたら美人のねーちゃんだもん。
しかもなんか透明人間に絡んでる酔っ払いみたいなことするし?
俺なんかもう、散々びくついてたのに… 笑っちゃまつよなあ」

へらへらーと、おばかさん感全開で微笑む慶に、
深はただただ啞然とするしかなかつた。

それは黎も同じじらしく、戸惑いと驚愕以外の感情が読み取れない、
なんとも説明しがたい表情でかたまつていた。

『透明人間に絡んでる酔っ払い』の部分は、

それは慶には宰が見えていないのだから、そう見えるかもしねりない。
けれど、やはり立場上の関係でそこまで正直な感想は危険だと思う。

冷や汗を浮かべて、

深は相変わらずおかしな表情なままでいる黎を見やる。
頼むから、キレて慶を殺したりしないでほしい。

「そりゃあ人間じゃないのは見ればわかるんだけど、
なんかなー…

俺美人の姉ちゃん好きだから複雑なんだよなあ…」

深を誘拐した悪いやつは、実は好みの美人だった。

先ほどの慶の発言から、

彼が遠回しに言おうとしていることを正確に理解した深だが、しかし慶のことがかぎりなく分からなかつた。

怖いもの知らずなのか、混乱しているのか、

おバカすぎて警戒できないのか、状況が分かつていののか、それともただバカでバカでバカで限りなくバカなのか。

さて、どれだらう。

「なあ、それより俺深がいないと困るんだ。

じいさまに喧嘩売つてきたから。

深が味方してくれないとさ、

俺あの死に損ないに締め上げられて死んじゃうと思つ

だから深の片割れをこっちに帰してくれと、慶は要求した。

黎は相変わらず困惑しきつたまま、

宰の肩を抱いて自分のほうに引き寄せた。

それからじばりくして、きりりとした眉を跳ね上げる。よひやく怒りが浸透してきたらしい。

「人間風情が、ふざけたことを言わないでちょうだい

低く凄んだ声で、黎は慶を睨む。

「そつちこそ宰の片割れをこちらにおよこしなさい。この子はわたくしのお気に入りな。

そこらじゅうに見せびらかして自慢するの。

長らく弟子のいなかつたわたくしを散々コケにした輩に、自分の弟子を戸棚に隠したくなるような気分を味わわせてやるのよ

「そんなんで俺から命綱取り上げるなよ！

弟子なら他当たれ。深は里に残るんだ。

あんたのばかげた復讐の道具にはならない」

「『ばかげた』とはなにごと？人間風情が何を言うの！ たかが人の子がわたくしに知った風な口を利かないで」

ピシヤリと慶の言葉をはねつけて、黎は深を睨む。

「ああ、ひからへこりつしゃい」

死人の」とく白い腕を伸ばして、
深に手を差し伸べるような格好をする。

「行きましょう。

穢れた生物と、これ以上の時間を過ごす必要はないわ」

「嫌だ」

黎の目が驚愕に見開かれ、やがて怒りの炎を燃やした。

深は、驚いたように血らの口に手を添える。

今のは、本当に無意識の行動だった。

「何を言うの。

”妖”と”人間”的在り方はしっかりと説明したでしょう。あなたは”人間”でいなくてすむのよ。どう考へてもわたくしの手を取るべきでしょう！」

「嫌だ」

今度は、自分の意思だった。

「僕はあなたが言う”人間”とは違う”人間”を知ってる。里のみんなを汚らわしいと思つたこともない。だからあなたの言い分には賛同できない」

確かに、それは意志。

「僕は”宰”にはなりたくない。
”深”のままでいたい。

だから僕の片割れを僕によこして

きつぱりと、深は言い放った。

そして。

「僕も”深”にはなりたくない。

”宰”のままでいたい。」

きつぱりと、宰は言い放った。

その場の全員が、その表情を驚きを表すそれにする。だがやがて、深のそれは苦渋に、黎のそれは歓喜に変わる。

「名前が違う。

僕らは孤立した、別々の一 固体。

一度と一つには戻れない

淡々とした無表情なそれは、とても冷静に、真実だけを告げる。

「だから、このまま別々に在ればいい」と思つ

その提案に、黎はその整った顔を極限まで歪めて抵抗した。
がつしりと掴まれた宰の肩に、黎の爪が食い込む。

滲んだのは、赤い血ではなく、銀色をおびた透明な液体。

「それはだめだわ。

もともと一つの存在が二つに分かれたら、

それはもう不安定で不確かな、弱々しい存在でしかないわ。
不完全なのよ。

すぐに消えてしまつわ。

それでは意味がないのよー」

「不完全ではあっても、不確かではない。
すぐに消えてはしまわない」

相変わらず、無表情で単調なそれは、ますます黎の怒りを呼ぶ。

「何を根拠にそんなことを言つの？

今まさに分離した、生まれたての赤子も同然のあなたが、
いつたい何を知つているというの？

百年以上の時を生きたこのわたくしにむかって、
どうしてそのような態度がとれるというの！…」

「ばあさんだつたのか…」

慶の不謹慎なつぶやきは、
小さかつたおかげで宰に噛み付く黎の耳には届かなかつた。

「根拠は本能。

”深”は人間だから良くわからない。

”宰”は妖だから自分の在り方がよくわかる。

妖は自然に属する限りなく無に近い存在。

力をつけて自我を持てば、それは無ではなくなる。

黎が嫌う人間に近くなる。

黎はそれを受け入れないから、自分勝手におも驕る。

弟子ができない理由は、それ」

黎の顔から表情が消えたとたん、周囲の蝶が動いた。
それは見る見るうちに黎の身体にまびりつき、
黒灰の鎧となり、大剣となり、盾となつた。

宰を切り刻むべく振り上げられる凶器を前に、
深と慶はわたわと慌てるものの、

声はでないわ手足も思つように動かせないわで結局何もできない。

そのなかで、

ことの当事者である宰は相変わらずの無表情でそこに居る。
それがますます黎の気を逆なでするのか、
もはや美しさの欠片も残らない鬼の形相で、

黎は宰に向かつてその大剣を振り下ろす。

瞬間。

地表から湧き出した白銀の波が、
その禍々しい凶器を受け止める。

黎の顔が、驚愕と屈辱に色を変える。

今まで少し俯いていた宰は、ゆっくりと顔を上げた。
その深い藍の目は、無表情の奥に侮蔑の光を宿し、
そしてその口元には、どこまでも不自然な、
作り物の笑みが浮かんでいた。

ぞつとする、冷たいものを、黎は感じた。

「黎は愚かだから、僕が説明してあげよう。
”宰”と”深”は不完全な存在。
完全じゃないから、完成していない。
これからそれぞれが”妖”として、”人間”として生きることで、
それぞれの欠けた部分が補われる。

その理由は、力の弱い透明が、
やがて力の強い漆黒になるのと同じもの。

だから別々に生きてても、それぞれの命になんら支障はない

「どうしてよ……」

宰の話を少しも聞いていなかつた黎は、震える薄紫の唇から地を這うよつなおぞましい声を出す。

「どうして…？」

あなたに名前をつけたのはわたくしなのに！
あなたは少しもわたくしの意思を受けない！
自分勝手に動く！

おとなしく切られるように命じたのに！

どうしてわたくしの命に応じないので？

どうして今のあなたにそんな力があるの…！…！」

「黎は本当に愚かで何一つ分かつていないので、親切な宰が説明してあげよう。

”深”が離れて”深の片割れ”になつた僕は、それはもう生まれたての赤子よろしく無力だった。けれど黎は愚かだから、

見場を良くするために、自分の部屋に力を撒き散らしていた

撒き散らされた力があの薄紫の霧であると、

深は無意識の内に理解していた。

それはやはり、なんらかの形で”深”と”宰”が繋がっているから。

「それを黎にばれない程度に吸収したら、自我を持った。

自我を持つたら、黎が愚かで、

それゆえに貧弱であることに気づいた。

だから、取り込んだ黎の力に僕の意思を交えて、流した。

黎は絶えず無意味な独り言をつぶやいていたから、息も無駄に大きくしていた。だから僕の意思を吸い込んだ。

そして僕の意思のとおりに動いた。

黎は僕の意思で、僕に、僕が僕をつけたのと同じ名前をついた。
だから、”宰”は黎がつけた名前じゃない。

”宰”は黎に支配されない。

けれど”宰”的を吸収した黎は”宰”に支配される。
なぜなら、”宰”とは”同る者”であるから

宰は、賢い。

とんでもなく賢く、それはそれは狡猾だ。

人間が親から子へと受け継がせる知識を、
自然から生まれる妖は本能として持っている。

宰はそれを最大限に生かすことのできる頭脳を持っている。

そしてなにより力の桁がちがつた。

長年”深”の中ではぐくまれてきた”宰”的の力は、
賢さや素質の違いも相まって、黎のそれを軽く超えたのだ。

感嘆と尊敬に満ちた気持ちでいる深の目の前で、
宰が動いた。

正しくは、宰が従えている白銀の波が、だ。

それはしゅるしゅると滑るような動きで黎を包み込み、
そのまま彼女を飲み込みはじめた。

宰の姿が見えない慶に、宰が従える波の姿も見えるはずがなく、
彼は、ただただ困惑した表情で、
硬直する黎の姿を凝視することしかできない。

「宰…？」

かすれる声を搾り出して呼びかけた深に、

宰はその深い藍色の目をゆっくりと動かし、片割れを見やる。

「慶は宰の存在が不完全だから、

黎より強い宰が見えない。

黎が愚かな弱者であるぶんそれが悔しいから、
黎を取り込んで存在を完全なものに近づける

これから自分がやろうとしている」とい

その動機を簡潔に説明して、宰は黎に視線を戻す。

彼女はもつ、完全に白銀の波に包み込まれていた。

黎の姿が、どんどん白っぽくなつていいくのを、慶はただ見ていた。

白くなつた黎の身体がどんどん小さくなつて、
やがて半透明の小さな蝶になり、ついには消えてなくなるまで、
慶はそれをただ見つめていた。

他に、見えるものがなかつたから。

この場でもうとも困惑しているのは、慶だ。

彼には宰の姿は見えないし、声も聞こえない。

深と黎には聞こえていた宰の丁寧で無機質な説明も、慶には聞こえていない。

けれどもやみに口を開くべき空氣ではないと感じたから、慶にまめずらしく、黙つたままおとなしくしていた。

その横で、白銀の波が少しずつ黎を取り込み、同時に黒っぽく染まつていくのを、深は見ていた。

あの黒灰色の蝶の群れが黎の一部であったように、この”波”もまた、宰の一部なのだろう。

じわじわと、波が取り込んだ黒が、宰に浸透していくのだろう。

その証拠に、宰の透明感は少しずつながら失せ始めていた。

「慶……」

唐突に名前を呼ばれて、慶は喉の奥を震わした。

困惑のあまり、まともに声を発することができないのだ。

声帯がくしゃげた猫のよくな、”ロロ”とした変な音が出る。

「宰が、黎を取り込んだ。

黎よりも宰のほうがずっと頭が良かつたから、

黎は宰の眼にはまつて自業自得な状況

深が状況を説明してくれているのだと、一泊遅れて慶は気づく。全身の筋肉が固まってしまったかのような状態のなか、慶はなんとか浅く頷いた。

それを気配で感じ取ったのか、深は先を続ける。

「で、宰はいま黎の力を消化中。

もう少ししたら、きっと慶にも見えるようになる」

深が言つたとおり、慶には宰が見えるようになり始めていた。

薄つすらと浮かび上がる蒼い影に、慶は目を見張る。

とてもなく遠くに感じるが、

それでも言葉が聞き取れる程度には近い声が耳に届き、慶は元々大きなその口を、さらに大きくあんぐりとする。

その声は、深のそれにとても良く似ていたから、

きっとそれが宰の発するものなのだろうと、意識の隅で判断した。

徐々に、姿と声がはつきりしていく。

表情のない、深い藍色の瞳。

ところどころに鱗がはえる、見事なほどに蒼い肌。漣のそのように銀に揺れる短い頭髪。

纏う衣は上質な黒。

水かきや耳鰭、衣の裾から除く尾鰭は、

月明かりに透けてほのかに蒼く見えるが、しかしそれは黒。

色違いでわんさかと付録付きの深が、
真夜中の荒野にぼんやりと浮かび上がった。

「この程度じゃ、まだ慶には半透明に見えるかな

おひしゃりおつ、透け透けで」やれこめす。

異形のやつへつたとを田前し、慶は声が出なかつた。

そんな慶の代わつと叫ひては何だが、
付き合ひの長い深が慶の代わりに言葉を返してくれた。

「やひりこよ。

見かけが少し変わつたね

もつと色が濃くなつて、鱗やらなひ、やたらと付いたね
とは言えず、控えめな発言ことじめておいた。

けれどさすがは片割れ。

深の思考を見透かしたように鼻を鳴らして、
衣の裾から覗く自分の尾ひれを足でつづいた。

「僕も鬱陶しこと思ひ」

そつこつて率せんりと背を向け、
背骨に沿つよひーー直線に生えた背びれを指差す。

「呑向けて寝転べないよね

なんだか、先ほどの壮絶な光景を見た後だと、宰の「ひつこ」行動がとても間抜けに見えてしまつ。

「すげー…」

慶が、やつと声をあげた。

深と宰がそろつて慶のほうに視線を投げる。

「一卵性双生児」

そりつぶやいて、慶は笑つた。

「お前らそりつくり！」

俺怖いなあ、腹黒野郎が増えちゃつたよーーー。」

なんとなく、その場の空気が和んだ。

宰と深は同時に少し微笑んで、

「「腹黒なんて安い言葉で僕の頭脳を片付けないでほしいな」」

見事にハモつた。

慶が腹を抱えて爆笑し、

深と宰が顔を見合わせて複雑な表情をつくる。
もちろん、宰の表情の変化は、
相変わらず「ぐぐぐ」微かなものなのだけれど。

「どうあえず僕が里まで送りいフ

宰は地面を転げまわって爆笑し続ける慶を見下ろして、付いて来いという風に堂々とした足取りで歩き出した。短い銀髪がさうりとゆれる。

「わかるの？」

無に近い空間を慶の声頼りに移動してきた深は、自分の気配をたどれないから、道がわからない。

「わからないのに先頭にたつて歩かない」

即答した宰の声はやはり淡々としていた。

思い出したよつて転げまわって笑うのをやめた慶が、地面に腹ばいになつた状態で宰を見あげる。

「こしても本当にいたんだな、魚人」

宰の眉が引きつったのは、おそらく氣のせいではないだろ？

「慶、あんまり失礼なことこうと捨てていかれるよ、色んなものを」

「やつだね。たとえば慶の命とか命とか命とか……ね？」

呆れのこじむ声が深。

無表情に淡々と恐りしことを言つ声が宰。

「いやだなーそんなん！仲良くしようーー！
俺一生懸命良い子に宰の後付いて歩くから、
仲良くしよう！お友達になりますよーー！」

なんだか引きつったその声は、慶のもの。

三つの声が曉へと向かう夜空の下、
獸道ですらなじような場所を通して移動する。

向かう先は、暖かな場所。

心配しながら帰りを待ってくれる、
そんな人たちが居る場所。

『ただいま』

といつ声に

『おかげ』

と答えてくれる場所。

(後書き)

ああー…長かつたよ！

本当になんだか長かつたんですよ！

短編つてこんなに長いのかな！？

もう書き終わつた喜びで御節がおいしかつたーー！

どうも始めまして。

誘森と申します。

いかがでしたか？『白黒』

個人的には比較的自信のある一作が故に、

投稿させていただきました。

ご感想、ならびに評価などいただけましたならば、
幸いなことこの上ないぞこません。

あらすじにも表記させて頂きましたとおり、
シリーズ化させていただく所存ですので、

もし興味がございましたらば、どうぞ「観覧ください」。

最後まで読んでいただき、
まことにありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3557d/>

白黒

2010年12月29日20時25分発行